特殊形アクセントの問題点

上野和昭

キーワード　アクセント史　特殊形　動詞アクセント体系　接尾辞　ザリ活用

一

動詞アクセントの活用形に、はじめて特殊形なるものを設定して説明したのは金田一春彦（一九六一）である。一般に行われている未然形以下の六活用形のほかに、「次のａｂｃのものはこれを一括して特別のものとして立てるのが便宜であるから、これを集めて「特殊形」と呼ぶことにする」として、

ａ　未然形のうち、助動詞「す」「ぬ」「む」「る」がつく形、「ぬ」は「ず」の連体形と言われているものである。

ｂ　連用形のうち、過去の助動詞「き」の連体形「し」がつく形。

ｃ　終止形のうち、助動詞「べし」のつく形。

の三項を挙げられた。動詞の活用形にアクセントの面からさらに区別すべきものがあることは、早く築島裕（一九五一）によって指摘されていたが、築島は「特殊形」という用語を用いず、ただに未然・連用・終止各形に二または四の区別を施し、全活用形にわたって十一列の枠を設けて説明した。右記の金田一の考えは、築島のそれを発展させたものであり、今日のアクセント史研究においても基本的に継承されている。

金田一のあと桜井茂治（一九六三・一九八四）、秋永一枝（一九九一）は、それぞれに接続する語例を補いながら、ほぼ「特殊形」という用語に従ってきた。また奥村三雄（一九八一）は、扱った資料が近世に下ることもあって、用言の活用形アクセントをＡ形からＬ形までの十二形に細分し、その中に特殊形相当のものをも含めている（ＢＣＦＧＫＬの諸形）。

しかし、金田一以後の研究においては実例の記述分析に重点が置かれたために、特殊形そのものの意味を問うことが少なく、せっかく金田一が三活用形にわたるものを一括して「特殊形」と呼んだにも関わらず、それが〈それぞれの活用形の特殊形〉と受け取られて分析されてきたについては、見落とされた点も少なく

ない。

とは言え、特殊形の本質について、金田一（一九六四）は必ずしも明示的なことを述べてはいないが、個別的な事象の説明に、この問題に対する考えが窺える部分もある。たとえば、次のような記述がそれに当たる。

《特殊形》というものを動詞の一つの活用形と見るということは、既成文法にひきずられた見方で、われわれはアクセントの性質から見て、これは複合語の一部をとくに切りはなした形の抑揚の姿を見ているのだとも言える。（三九九頁）

（特殊形は、終止形や連用形などがいかにも一語というアクセントであるのに対して）形が悪く、次に来る助詞・助動詞の類といっしょになって一語としてのまとまりを作っていると言える。（中略）助詞・助動詞をそえた全体を一語と見、動詞の派生形の一つと見る方が適当だと言える。（四〇四頁）

これによると、特殊形とは、それに接続する部分とともに全体で一語になる場合の、アクセント型の一部を切り出した、という一面をもつものである。それが古くは、語音としては未然・連用・終止形それぞれの形を採りながら、アクセントは高平または低平であったから、これらを一括した名称として「特殊形」という名を与えたものと思われる。

二

小論では、はじめに使役・尊敬の助動詞とされるス／サスおよび受身・自発などの助動詞ル／ラルについて検討する。これらは、いわゆる特殊形接続の助動詞であって、アクセントの上からも接尾辞として扱ってなんら支障はない。しかるに、このようなものについてすらも、従来の諸研究では、全体を必ずしも一語として扱ってきてはいない、という問題がある。それは、奥村（一九八一）が述べるように「付属語であれ接尾辞であれ《その形式のアクセントを、なるべく詳細にとらえる》ということの重要さに変わりはな」（四八一頁）く、さらには「これらの語形の分析を避けようとするならば、（中略）学問的態度としての怠慢」（四〇〇頁）と見做されることによるのであろう。しかし、付属語として扱うことによって、実例に対する不合理な理解が生まれては、捉え方そのものに問題があるのではないかという疑問も出てこよう。

ところで、これらの助動詞を接尾辞として扱うについて、全く躊躇がないかとなると、ここに解決しておくべき問題が一つある。それは、ほかならぬ金田一が提出しているもので、われわれはこれに答えるところから出発しなければならない。

金田一（一九六四　三九九頁）は、『図書寮本類聚名義抄』において受動態の動詞の終止形「縛らる」に〈平平濁平上〉306－4という声点が差されていることなどを取り上げて、「これを一つの動詞と見れば、こゝに○○○◓型の動詞が存在することになる」とした上で、次のように指摘する。（以下、●はアクセントの高拍を、○◓◒はそれぞれ低拍・下降拍・上昇拍をあらわす）

これは、動詞プラス助動詞と見るのが、現在国文法学界の一般の趨勢である。その考えで通すならば、○○◓型三拍動詞の《特殊形》は○○○であるから、「る」を◓と考え、○

○○◓型という形は動詞プラス助動詞と認めてもいいことになる。この時代に、低くはじまる一般の四拍の動詞は○○●○型なのであるから、この「る」がついた形は二語だと見ることには一つの根拠がある。

金田一は最終的に「全体を二語と見ることも一語と見ることもできる」と結論するのであるが、ここの部分の記述には、簡単には見過ごせないものが含まれていると思う。なぜならば、ルを接尾辞と考えるかぎりは、その接続した全体のアクセントが、当時一般の動詞のそれと一致していなければならないことを教えているからである。そうでなければ、全体の姿そのものを一語の動詞と見做す根拠が揺らぐ。そうなれば、当然ながらルを接尾辞とよぶこともできなくなろう。

ここに、当時の動詞アクセント体系を確認しておく必要があろう。左表は、院政期頃の動詞終止形あるいは連用形アクセントの体系を整理したものであるが、現在ふつうに知られているものとは様子が違っている。ふつう一般には四拍以上の第二類に、ここでいう第三類の型が位置づけられる。

動詞の終止形・連用形のアクセント体系[1]

終止形・連用形の拍数	一	二	三	四	五
第一類	◓	●○	●●○	●●●○	●●●●○
第二類	(＊)	○◓	○○◓	(○○○◓)	(○○○○◓)
第三類	(＊)	(◒○)	○●○	○○●○	○○○●○

秋永（一九九一　九〇～九六頁）によれば、文献から知られる院政・鎌倉期の様相は、三拍では二類型、四拍以上では、ここでいう三類型がそれぞれ低起式動詞の主流であるが、三拍の三類型も無視できない数を指摘することができ、それらが語により活用形によって遅速の差はあれ、徐々に二類型に移行したとされる。このち、いずれは四拍も五拍も二類型に整えられることになるのであろうが、実際にはそれを待たずに、室町期以降の新しい体系に組み替わったらしい。しかし、ここに院政期以前の様子を考えるならば、三拍の場合には三類型○●○が勢力を持って二類型と拮抗し、四拍以上でも三類型が不動の位置を占めていたことであろう。

してみると、低起式動詞の終止形や連用形の多数形が、三類型○●○・○○●○などから二類型○○◓・○○○◓に移行する時代に、ちょうど院政・鎌倉期は当たるわけであるから、文献において四拍以上で三類型が優勢であっても、背景となる社会の実態はむしろ二類型に、より一層移行していたと見てよく、多くはすでに二類型になりつつあったものと考えて誤らないと思う。逆に時代を遡れば、一時代前の多数形は三類型であっただろうから、そのような時代に接尾辞を付けた動詞は当然古い型、すなわち三類型で定着したことは説明するまでもない。したがって、金田一が懸念した『図書寮本類聚名義抄』の例も、すでに低起式動詞の一般的な型が二類型に移行していたために、口頭に上りやすい、そのような型に類推したものと解釈できるのではあるまいか。[2]

ただ、ここに取り上げるス・ルには四段と下二段と両様あって、それらを区別すべきではないかという疑問もあろう。しかしそれも、これら二活用が起源的には同じ、自動詞的語尾・他動詞的語

尾に基づくものであることに気付けば、なんら支障とはならない。いずれも接尾辞として動詞の未然形に付き、全体として一語同様の働きをしたことは疑うべくもないからである。そのアクセントの成立が古ければ、全体として三類型を採用したであろうし、新しければ二類型に類推したであろう。むしろ問題は、接尾辞であるならば、そのアクセント上の接続については、いわゆる特殊形に続くのは新しい成立のもので、古くはいわゆる未然一般形に続くと考えられる、ということではなかろうか。これは、特殊形の定義にも関わる重要な問題である。接尾辞の付いた動詞のアクセントを問題にする時には、このことはもっと注意されてよい。(3)

三

さて、一語のアクセントというからには、ス／サス・ル／ラルの接続した語形も、ほかの一語の動詞と同じく振る舞い、南北朝期にあったとされるアクセントの体系変化（体系変化はほかにもあったが、この時期の変化はとくに大きなものだったので、小論ではこれを「体系変化」と括弧付けでよぶことにする）にも、そのままの姿で臨んだはずである。そして、その後も語基と接尾辞とが原則として分離することはなく、中世後期以後は、一語動詞と同じように類の合同や型の統合もあった、と考えるのが順当であろう。

ところで「体系変化」の結果は、いわゆる特殊形アクセントの部分だけを取り出して分析する場合に、さまざまな問題をもたらすことになった。すなわち、まず第一に、特殊形のアクセントが古く低平の場合、後接する接尾辞が連用形レのように一拍であれば、特殊形は●…●○と末尾から二拍めに核ができ、連用形ラレ、終止連体形ルル・ラルルのように二拍以上であれば、同じく●…●と全高になるという具合に、特殊形そのもののアクセントが分裂したのである。奥村は、この前者をK形、後者をL形と名付けている。

しかし、複雑化したのはこれだけではない。接尾辞部分のアクセントにも問題が出てきた。すなわち、前接する動詞が一類動詞の場合は、連用形～セ／レ●…●○・～サセ／ラレ●…●○、終止連体形～スル／ルル●…●●・～サスル／ラルル●…●●であるのに、二類動詞の場合は、連用形～セ／レ●…●○・～サセ／ラレ●…●○、終止連体形～スル／ルル●…●○・～サスル／ラルル●…●○といった複雑極まりない様相を呈するようになった。もちろん対応法則は明確である。けれども、事態をこのように説明せざるをえなくなったのは、特殊形という考え方をこのような場合に適用し続けたためである。

さらに事態を悪くしたのは、やはり「体系変化」後に、多拍動詞のアクセント体系が、その類別に混同を来たし、ゆれを見せたことであった。ス／サス・ル／ラルが接続して一語相当になった動詞も、その混乱に同調したからである。

終止連体形四拍の動詞についての、この間の事情はすでに上野和昭（一九九八b）において詳述したが、そこから近世中期頃の体系図を引用すれば、次のようである。

近世中期頃の四拍動詞アクセント体系の基本図[4]

	語例	終止連体形	連用形	未然特殊形	命令形
第一類二段活用	重ぬる	●●●●	●●○	●●●	●●○
第一類四段活用	悲しむ	●●●●	●●●○	●●●●	●●●○
第二類二段活用	恐るる	●●○○	●○○	●●○	●○○
第二類四段活用	表はす	●●○○	●●○○	●●●○	●●○○
第三類二段活用	捧ぐる	○●●●	○●○	○●●●	○●○

右の体系は近世中期頃のものではあるが、およそ「体系変化」の後、室町期から近世後期までは、このような状態であったと見て誤らないだろう。だが、決して文献資料に現れる実態そのままというわけではない。ここに見るような体系としての強制が働く一方で、H4型はH3型と、さらにH3型はH2型と型の統合を起こし、そのために第一類と第二類との間に類の混同・ゆれが生じていた。「体系変化」以降において、四拍以上の動詞のアクセント体系を考える場合には、このことを忘れてはならない。ス／サス・ル／ラルが接続して、さらに多拍化した動詞も、この波を被ることになる。拍数が五拍、六拍と多くなれば、さらにアクセント型はゆれ、類別は混乱した。

平曲譜本[5]に現れる次のような例は、そのようなことを背景に理解すべきものと考える。

寄せさせ給へ〈上上××〜〉　九下三草5―5口説

忘れさせたまふべき〈上上コ××〜〉八上法印23―5口説

これらは一類動詞であるから、「寄せさせ」「忘れさせ」という部分の、後ろから二拍めに核のあるH（-2）型に実現してよいものである。もちろん、そのような例も多く指摘できる。しかし右の例は、次に掲げる二類動詞の場合と同じH（-3）型を反映した。これは、体系的強制を越えて、H3型●●●○とH2型●●○○、H4型●●●●○とH3型●●●○○とが型の統合を起こしていたために現れたもので、当時の口語が如実に反映したと考えられる。

延びさせ給ひて〈上上××〜〉　十上鹿谷1―2口説

助けさせおはします〈上上上××〜〉四上二后18―2素声

これについて奥村（一九八一）は、サスという接尾辞がスに比較して「二語的性格が著しい」（四八四頁）ためと説明する。そのような事情は、もちろん考慮しなければなるまい。しかし、動詞アクセント体系全般を見渡す必要もあろう。たしかに、接尾辞スの接続したものには、このような不規則な例を、サスの場合に比べて見出しにくい。しかし次のような例も、まま挙げる事ができる。ここは奥村が同時に指摘する「音節数の違い」を重視すべきであろう。それも、接尾辞の拍数ではなく、動詞全体としての拍数である。拍数の多い方が、型の統合を起こしやすいし、類の合同も早い。[6]そして事態がこれほどに一律的な説明を拒むのは、体系的強制と、型の統合という二つの力が交差して働いているからである。

切らせ給ひたりとも〈上上××〜〉　十三上聖幸8―4口説

誓はせおはしませ〈上上コ××〜〉　三下先帝16―2口説
同様なことはル／ラルについても言うことができる。
討たれぬ〈上上××〉　十三下法住20―5素声
破られて〈上上上××〉　十五上頚渡17―5白声
刎られたらんを〈上上上××××××〉七上烽火15―5白声
定められける〈上上上コ×××〉　十一座主10―2口説

右は二類動詞の例であるが、接尾辞が付いた全体としては、むしろ一類動詞と同じアクセントを反映する譜記が施されている。

以上から明らかなように、とくに「体系変化」以後、特殊形を立てて説明するのは、全体として一語の動詞であるものを解体して把握することになるために、動詞アクセント体系からの理解を妨げるという弊害を生む。

いわゆる特殊形をその部分だけで扱えば、たとえば坂本清恵（一九九二）が近松世話物浄瑠璃本を資料にして整理したような結果は当然得られようし、それはまたそれで詳細な分析として重要ではある。しかし、小論の立場からすれば、坂本の説明が複雑に錯綜する（四〇三〜四〇四頁）のは、資料的性格による部分もあろうが、従来からの分析的考察の限界を示しているように思われてならない。

四

いわゆる特殊形によってもたらされた、もう一つの問題点は、それが語源や語構成の考察にまで利用されたことであろう。もちろん、扱う内容によっては、結果として奏効する場合もあるかもしれない。しかし、特殊形接続か一般形接続かということで語源的に同じものかどうかを決めようとするのは、場合によりけりであって、いつも有効であるとはかぎらないのではないか。

ス／サス・ル／ラルにしても、低起式動詞に接続する場合には、先に全体として三類型から二類型に移行したと推定した。四拍で例示すると、三類型ならば○○●○、二類型ならば○○○◓となり、もとの動詞部分も○○●から○○○へと移行したわけで、いわゆる未然形一般から未然形特殊へと接続が変わったということになる。が、このような場合に、これらを接続の違いから二つに分けて、尊敬のスと使役のスとは語源的に別物だなどとは、誰も結論しないだろう。

しかし「動詞の未然形に付くか特殊形に付くかという差は、相当重視すべきもの」（奥村一九八一　四九七頁）とするのがアクセント史研究の、いわば常識であって、たとえば打消しの助動詞ズにおけるザ行系列の活用形ズ（未然形一般に接続）とナ行系列の活用形ヌ・ネ（未然形特殊に接続）とは、その接続の相違から別起源とされることが多い。

ただし桜井茂治（一九六三／一九七二　三六二〜三三〇頁）は、このズについて「自身は、常に低く○型に実現する」としながら、「独自のアクセントをもたず、常に付属語的である」とする点、ほかと趣きが違っている（いま付属語と付属形式の用語の問題は問わない）。さらに桜井はズを、ム・シム・マシ・ベシ・キとともに「独自のアクセントをもたず、先行語と一緒になって、語の一部分をなす（付属形式）もの」（三五八頁）として並べる。

そもそもズの接続する未然形は、それ自体独立して用いられることがなく、必ず他の形式と結合しているから、未然形接続のズがこのように分類されることに不思議はない。ところが、そのアクセント上での接続は、未然形一般（二類型ならば○●・○○●など）であって、特殊形（同じく○○・○○○など）とは異なる。一方また、一類動詞に接続する場合には、特殊形と一般形の区別はないからどちらとも言えるのである。

そこで一類動詞については、ズは特殊形に接続すると解釈して、そのことを根拠に、付属形式の側に分類するという考え方も成り立ちはしよう。しかしそれは、あまり本質に関わらない見方であると思う。

ところがここに、特殊形は後続の形式と一緒になって全体で一語並みになるアクセントだという考え方が結びつくと、反対に未然形一般に接続したズは、動詞部分との間に断絶をもつかのように理解されるのではないか。付属形式であるかぎり、それだけを切り離して、アクセントを論ずるのには注意が要る。ズの場合も例外ではなかろう。いわゆる未然形一般に接続していても、そしてズのアクセントがいつも○であっても、それは全体として●●○・●●●○とか、○●○・○○●○などという、用言の連用形相当のアクセントになっているからなのである。ズの部分は常に○でありはするが、それは全体としての姿の一部なのだから、ズ自身のアクセントの反映と考える根拠にはならない。まして、特殊形接続であるかどうかは、この場合問題にはなるまい。(7)

五

ズはまたアリと融合して、いわゆるザリ活用を行い、奥村（一九八一　四九八～四九九頁）も指摘するように、「体系変化」の時期に、たとえば「送らざらむ」●●●○○●＞●●●●○○、「移らざらむ」○○●○○●＞●○○○○○というように変化すると想定できるので、「「ザラム」の形が上接自立語と関係なく、それぞれに（中略）変化を起こした」と説明されている。

しかし、奥村のいう「否定辞「ザリ」の自立語的性格」という区切り方に問題があって、私見によれば、これは本来「有り」の自立語としての性格なのである。「送らざらむ」について言えば、〔オクラ・ズ＋アラ・ム〕という構造であったものが、〔オクラ＋ザラ・ム〕と分析されるようになってきた、というのが実際のところで、ザラムが独立するのは、口語性が希薄になったからであろう。

平曲譜本に、いわゆるザリ活用の用例を求めると、およそはザリ・ザルの部分は、前接する動詞に低く続いている。左の例は、「入れず」●●○、あるいは「満たず」○●○に、アリが続いて、後部のアクセントが卓立しなかったもので、この限りでは、ズを前後どちらに付けて解釈しても、たしかに問題は起こらない。

入れざりけり〈上上×××〉　三上葵前8―3口説
満タざるに〈×コ×××〉　五下緒環13―1口説

しかし、いわゆる特殊形接続のシ・シカが続いて「～ざりし・～ざりしか」となる場合も同様に従属式の譜記が見られる。これ

は、「ありし」は○○◐▽●○○、「ありしか」は○○●○▽●○○○と変化したのだから、[8] もし〔～＋ザリシ・ザリシカ〕と分析できるならば、すなわち、ザリ活用が独立していたと見做せるならば、「見えざりし」も「寄らざりしか」も、それぞれに○●●○○・●●●○○○となったはずであろう。

見えざりしに〈××コ××××〉　十四下坂落4—2口説
寄ラざりしかとて〈上コ××××××〉　五句都還2—1口説

しかるに右の例はみな、ザリの部分が低く接続している。このことは、やはり「見えず」○●○、あるいは「寄らず」●●○に、「ありし・ありしか」が続いたと解釈するしかないことを示している。そうでなければ、接合して後部要素が従属的になる謂れはない。

ところが、後に続く部分が～ザルベシとなると、一見不可解な譜記に出会う。

知らせざるべき〈上上上上コ××〉　二下横笛11—2口説
まかせざるべきとて〈上上上上上中中中〉　四上二后14—5指声

第一例は一類動詞に接続したものだから、ひとまず●●●＋●●○○と分析できて、それがそのままに続いたと解釈できる。しかし、第二例を同様に処理しようとすると、「任す」は二類動詞であるから●○○＋●●○○となって、接合アクセントは「任せざるべき」●○○○○○となろう。これは、右に掲げた譜記が反映しているアクセントとは言えない。ここは「任せざる」という一語の動詞並みのものを想定して、それにベシが付き、全体として形容詞相当のものになったのだと理解すればよい。そうであれば、「知らせざる」の方も同様に考え直すべきである。こちらは一類動詞だから、本来ならば「知らせざるべき」という形容詞相当の連体形は●●●●●●○とH（-2）型が普通だが、これが類の合同によって二類型形容詞並みのアクセントを採ったと言えようか。次に掲げる、二拍の二類動詞の例を見れば、このような解釈以外に考え様のないことが分かろう。[9]

過ぎざるべき〈上上上コ××〉　九下惟出5—5口説
立テざるべき〈上上上上××〉　三上新都6—3素声

さて、次に後続部分が～ザラムの場合について検討するが、これについては複雑で一律に説明するのは困難である。まず便宜、二類動詞に接続した例を見よう。

あらざらんものは〈上上コ××～〉　八上禿童4—3口説
攻落さゞらん〈××上上コ××××〉　五下逆櫓3—3口説
延びざらんものゆゑに〈上上××××～〉　九上阿古11—2口説

第一例は、やはり「有らざる」という動詞並みのものを想定して、○○○○●▽●●●○○の変化を経たとみれば分かりやすい。第二例は、接合動詞の例ではあるが、「落とさざらん」を抽出して問題ないから、ここも「落とさざる」という動詞並みのものを想定すれば同様に理解できよう。ただし、それならば「落とさざらん」●●●●○○というアクセントを反映した譜記が施されるべきであるが、ここは型の統合を起こしたものかと推定される。

そう考える以外に方法はなかろう。第三例は、二拍の動詞に接続しているから、さらに事情は明らかであろうが、やはり型の統合を起こしているようである。

しかし、一類動詞に続く次の例は、このような原理では解けない。なぜなら一類動詞並みのものがムに接続するときは、アクセントは高平になるのが一般的であるからである。これらは、もはやザラム○○●＞●○○というアクセント単位を想定しなくては説明できまい。

続かざらんに〈上上上コ×××〉　五下二魁18―1口説
酬ゥはざらんや〈上上上コ×××〉　五下福原4―4口説

このように検討してくると、外見上、動詞未然形にザラムが接続した形は、〔動詞未然形ザラ・ム〕という動詞相当の形を考えるべき場合と、〔動詞未然形＋ザラ・ム〕という構成をなす場合とがあるということになる。後者は、平曲譜本において一類動詞が前接する場合に現れ、前者は二類動詞が前接する場合に有効な解釈である。前者はさらに形容詞的接尾辞ベシを後接する場合にも適用できるが、その一方で〔動詞未然形・ズ＋アリ〕と分析すべきものが多くあることにも注意しなければならない。[10]

平曲譜本から知られるザリ活用の実態は以上のようであるが、中世後期以降のほかの資料はどうであろうか。必ずしも例数は多くないが、後部卓立式のほかに接合式〔動詞未然形・ズ＋アリ〕もある中に、『仮名抄』に見える左のような例は、それぞれに次のように解釈する。[11]

タヘザルカ〈徴々角徴々〉　不堪29―2

とあるのは「堪ふ」が二類型であろうから（早稲田語類「2か」）、「堪へざる」という一語動詞並みのものが形成される過程を反映したと解釈したい。

ヨラザレ〈徴々々角〉　不由27―3

も全体で一類動詞並みのものが出来ているとみる。また、

ナサザラン〈角徴々角々〉　不為39―2

については、「為す」が二類動詞であるから、これは〔ナサ＋ザラン〕としか分析できない。『開合名目抄』の次の例は、ともに全体として一語の動詞相当になっているものである。

アラザル也〈徴々角々々〉　有5オ5
トゾマラザルニ〈徴々々々々角々〉　留3ウ4

金田一（一九六四　四七四頁）が「室町時代以後のアクセント」かと考えるザルの●○型は、後世あまり例を見ないが、あるいは全体として～ザルという一語化したアクセントの反映かと疑えるかもしれない。[12]

また、中井幸比古（一九九七）によれば、高知市方言の打ち消しの過去形～ザッタのアクセントは、たとえば「買わざった」H2型が、「書かざった」L2型と対立する。しかし動詞部分が三拍になると、「荒らさざった」「騒がざった」など区別なくH3型である。高知は、動詞単独ではまだ「荒らす」H0型、「騒ぐ」H1型の対立があって、これらが合同しているわけではない。ここは、むしろ「荒らさざる」「騒がざる」という五拍の動詞の問題として捉えるべきだろう。

六

動詞が接尾辞と解釈されるものに接続する場合、その動詞部分のアクセントが特殊形であるか一般形であるかは、接尾辞を接続させた一語相当のものが、どのような動詞としてのアクセントを採るか、ということによる。したがって、特殊形接続か一般形接続かを問題にするよりは、むしろ全体の姿が、その時代の動詞として一般的なものであったことに注意を払う必要がある。

その意味では、打消しの助動詞ズも、従来前接の動詞と切り離して考えられがちであったが、前接動詞と一まとめにして考えた方がよいのではないか。それは、いわゆるザリ活用の解釈にも応用できる。ザリ活用が、～ザラムの場合などに独立した例を見せはじめるのは、すでに口語性を失いつつあった室町期以降のことで、その例も多くはない。[13]

以上が小論で述べようとしたことである。「特殊形」というアクセントの活用形を設定することによって軽視、あるいは無視されるようになった面を、もう一度見直そうと考えた次第である。

注(1) 表中＊印は◒か。「得・来」などの古い姿を推定。ここでは第二類と第三類との区別が中和される。また二拍の◒○も「見る・干る」などの古型を推定したもの（添田建治郎一九九六　一〇～一一頁参照）。後に◒が●になった時、第一類と同型になることをきらって、活用形の一部が第二類に類推したと考える。その結果、二拍の○◒は第二・第三類の区別が中和された型として位置づけられることになる。上野和昭（一九九八a　五三頁以下）も参照されたい。なお、小論の論旨からすれば、四拍に○●●○、五拍に○●●●○を想定する必要があるが、ここでは省略する。

(2) 奥村（一九八一　四八一頁以下）は、院政・鎌倉期における低起式動詞の一般的な型を、ここでいう二類型に置き換えるべきだとする。この主張は、以上の説明からも明らかなように一応は理解できる見解であるが、小論にいうような通時的観点からみる方が、文献に現れる資料の解釈には有効であろう。

(3) たとえば、同じ接尾辞とされるユ／ラユのアクセント上の接続を、ル／ラルへの類推だけから、いわゆる特殊形に続くと考えることがあれば、その着想には再考の余地があるように思われる。また、〈特殊形接続ならば接尾辞、一般形接続ならば付属語〉と簡単に割り切ることもできなくなろう。

(4) この表の未然特殊形とは、助動詞ム・ヌに接続するアクセント型のみを指す。上野（一九九八b）から一部改訂して抽出。第三類二段活用の終止連体形や未然特殊形は、遅上がりの○○●●に変化しつつあった。これによれば、終止連体形は第一類H0型：第二類H(-3)型、連用形は第一類H(-2)型：第二類H(-3)型という対立があったと解釈できる。命令形は連用形に準ずる。未然特殊形については、便宜そのような術語を用いるが、小論の立場はこのような扱いに反省を求めようとするものである。

(5) 平曲譜本は、東京大学文学部国語研究室蔵の青洲文庫本『平家正節』による。金田一春彦編『青洲文庫本　平家正節』（一九九八　三省堂）の影印と同じもの。このうち「口説」「白（素）声」の曲節から用例〈（上）〈コ〉が〈×〉（無譜）に対して高い）を引いたが、一部「指声」の部分（〈上〉が〈中〉に対して高い）から補ったところもある。以下同様。

(6) 中井幸比古（一九九七　二二六～二二八頁）によれば、高知市でも多拍になると、類の合同が起こりつつある模様。

(7) この場合、桜井（一九七六　三六五～三六六頁）が、基本アクセントとの関係を指摘するのは、きわめて示唆的である。

(8) ～シ・シカについては、近世において「文語的性格が型の伝統性を薄れさせた」（奥村一九八一　五一一頁）という面もあるが、平曲譜本には「有りし・有りしか」の場合、伝統的な●○○、●○○○というアクセントを反映するもの以外出てこない。

(9) ～ザルという全体を一語相当とみることで、奥村（一九八一　三九七頁）の挙げた例外はすべて説明できる。なお、そこで例外とされた「過ぎざるに〈上××××〉」（尾崎本一一八―二白声）は、〈×上×××〉の誤りであろう。むしろ東大（青洲）本（二上文強11―4白声）に〈上××××〉とある譜記の方が例外的。東大本にも別の箇所では、同じ詞章に〈×コ××××〉（十三上門落5―2口説）とある。

(10) 奥村（一九八三　一二四頁）に「有らざら〈×中××〉ん」教25の例が挙げられているが、これは接合式のものである。

(11) 桜井（一九八四）による。

(12) 秋永（一九九一　二〇四～二〇五頁）が疑問とする「顕昭本の「ざらめ」に〈上平上〉がみられること」については（逢はざらめやも〈平上上平上上平〉顕天平568＊）、これをこのままに受け取れば、早い時期からズがアリと複合して動詞部分とは分離していたということになり、小論の立場からは不都合になる。「誤って移声したもの」と解したいところ。もちろん移声者や移声の時期なども問題になろう。

(13) 門前正彦（一九六〇）によれば、「融合形は韻文の調子を整えるために発生し、韻文においては早く融合する傾向にあったことが「ざり」に関してもいえそうである。要するに散文系では平安初期でも未融合形がふつうである」（四七～四八頁）という。金田一（一九六四　四七四頁）は、この門前の説を引きながら「鎌倉時代のはじめまで「ざり」には「ずあり」の意識があったものであろう」と述べる。アクセントの上からみるかぎり、融合形であるザリ活用の部分が独立した様子を見せはじめるのは遅くとも鎌倉末期にはあったかもしれないが、多くの伝統的な形は～ズ＋アリという接合の姿を残しており、これが融合する場合には、ザリ活用の部分のみが独立するよりも、むしろ全体で～ザリという一語の動詞並みのまとまりを形成していったものと考えられる。

【引用文献】

秋永一枝（一九九一）『古今和歌集声点本の研究』研究篇下　校倉書房

奥村三雄（一九八一）『平曲譜本の研究』桜楓社

――――（一九八三）『平家正節語彙索引――節ハカセ付き語彙集成――』大学堂書店

門前正彦（一九六〇）「漢文訓読史上の一問題（三）――助動詞「ざり」について――」『訓点語と訓点資料』13

金田一春彦（一九六一／一九六四）『四座講式の研究』三省堂

坂本清恵（一九九二）「動詞未然形のアクセントと付属語の接続について――近松浄瑠璃譜本を資料にして――」『辻村敏樹教授古稀記念日本語史の諸問題』明治書院

桜井茂治（一九六三）「アクセントから見た助動詞の分類」『国語国文』32―2／のち『中世国語アクセント史論考』（一九七六　桜楓社）に再録

――――（一九八四）『中世京都アクセントの史的研究』桜楓社

添田建治郎（一九九六）『日本語アクセント史の諸問題』武蔵野書院

築島　裕（一九五一）「浄弁本拾遺和歌集所載のアクセントに就いて」『国語アクセント論叢』法政大学出版局

中井幸比古（一九九七）『高知市方言アクセント小辞典』科研成果報告書

上野和昭（一九九八a）「早稲田語類の外周――動詞の類別とその問題点を中心に――」秋永一枝ほか編『日本語アクセント史総合資料　研究篇』東京堂出版

――――（一九九八b）「中世後期以降の四拍動詞アクセント体系についての史的考察」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』43（3）